
REC・in・japan/ **レック・イン・ジャパン**

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REC・in・Japan/レック・イン・ジャパン

【Nコード】

N3261X

【作者名】

モンスター

【あらすじ】

ある日テレビの取材で消防士の方々と同行する事となった佐々木冬香は、

アパートへ消防隊と向かう。

しかしそれは悪夢の始まりだった……………

この小説は、映画RECの日本版です。

密着取材（前書き）

登場キャラ

佐々木冬香

テレビのリポーター。美人。25歳。

大野和明

テレビのディレクター。

密着取材

「今日は、消防士の方々と同行したいと思います」

私、佐々木冬香はある番組のリポーターで今度放送するテレビの為にこうして消防士の

仕事に密着取材するために来ていた。

「消防士の仕事はどんなことをしているんですか？」

これは普通子供でも知っていることだがテレビの為仕方なく聞いてみた。

「そうですねーまあ大体が火事の消火や人命救助、猫の救助も行っています」

最後の猫の救助のところで他の消防士の方も笑い出した。

「そうなんですか、猫の救助というのは意外ですね」

「まあ、実際猫を助けるのは消防隊の仕事ではないんですがねそういう電話が掛かってきたら

無視するわけにもいかず救助に向かっています」

そこで一旦カットされディレクターの大野和明が近付いてきた。

「いいね、この調子で頼むよ」

「はい、分かりました」

ディレクターが去ると今度は消防士の一人が近付いてきた。

「実は、さっき要請があつてアパートの隣の部屋から悲鳴が聞こえらしいから今から向かうんだが

君も来るか？」

「はい、行かせてください」

「よし、分かった。君の上司にも伝えてくるからここで待っていてくれ」

消防士が去ると私は自分のカメラも一応持つていくことにした。

この時は、大して意味がなかったが後にこれが役に立つとは、全く思っただけだった。

密着取材（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております。

悪夢の始まり（前書き）

登場人物

柴田祐介

警官であり元自衛隊。警察には親のコネで入った。

悪夢の始まり

「私は今通報を受けた消防隊に同行してあるアパートの前に来ています」

ここでカメラの前に消防士が出てきた。

「どうしてここに来たんですか？」

「さっきある女性から隣の部屋から老婆の悲鳴が聞こえたらしい」「そうなんです、ありがとうございます」

こうして一旦カットとなり全員でアパートへ向かった。

このアパートは、入ってはいけない。何だかそんな気がした。中に入ると警官が四人いた。

警官たちがこちらに気づくと近寄ってきた。

「お前達、ここで何をしている」

「俺達は通報を受けここにやって来た」

警官は少し悩んだ様子だったが喋り出した。

「実は、俺達も通報を受けここに来たんだ」

それは……

「それって、どちらも同じ理由でここに来たってこと？」

不意に口を開いた私を警官がジロジロ見てきた。

「そこのお嬢ちゃんは、誰だ？」

お嬢ちゃんですって！

「私には佐々木冬香というちゃんとした名前があります。それに私はテレビのリポーターです」

少し驚いた様子だったがすぐに気をなおしてきた。

「すまなかった、俺は柴田祐介だ。よろしく」

彼は近付いてきて握手をするため手を出してきた。

一応私も手を出しお互い握手をした。

すると警官は最後にこう言った。

「このことは、放送するなよ」

「・・・分かった」

二人は別れ今度は警官と一緒に老婆の悲鳴が聞こえたらしい部屋の前に向かった。

扉の前に立つと鉄の匂いがした。まるで血のような・・・

まさかね、私は悪い考えを打ち消すように口を開いた。

「ここで合ってるんですか？」

するとさっきの警官が頷いた。

「開けるぞ・・・」

消防士の一人が扉を開いた。

全員奥に入っていく・・・

これは・・・中には老婆が血塗れになって倒れていた。

悪夢の始まり（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

感染

「大丈夫ですか？」

消防士の一人が血塗れの老婆に近付いていった。

その時少し老婆が動いた気がした。

消防士が老婆の脈を測り始めた。

「脈がない、死んでる」

消防士がこちらに向かおうとすると後ろから老婆に足を掴まれた。

そして消防士の足を噛み始めた。

「おい、こいつを離してくれ」

すぐに警官達が老婆を消防士から離れさせた。

それでも老婆は、こちらに向けて走ってきた。

「仕方無い・・・」

警官の一人、柴田祐介が拳銃を取り出し足に向かって引き金を引いた。

老婆は、そのまま倒れたが再び立ち上がると足を引きずりながら近付いてきた。

「おい、止まれ」

再び銃を向けるが効果は無かった。

「分かった、お前は異常だ。逮捕する」

祐介は後ろに回り込み腕を無理矢理、手錠で拘束した。

「本部、悲鳴はただの精神異常者のものだった。ついでに救急車を送ってきてくれ。」

精神異常者に消防士が噛まれた」

無線を終えると祐介はこちらに向いた。

「お前達も帰るぞ」

警官達4名に加え消防士3名、私とディレクターの全部で9人が出口に向かって歩き始めた。

「結局あれは、何だったんでしょね？」

私は誰というわけでなく聞いてみた。

「分らない」

答えたのは祐介だった。

最後の角を曲がると出口があり外で黒服の部隊が何かをしていた。

「あれは」

「警察特殊部隊SATだな」

私の言葉を引き継いだ祐介は、私達を待たせ一人向い始めた。

「お前達、何をしている？」

SATがこちらに気づくと祐介に何かを向けた。

それは、軽機関銃のようにも見えた。

その後何かを話したあと私達に来いと言ってきた。

「どうしたの」

私達が近付いていくとSATが持っている物はやはり軽機関銃だと分かった。

SATが口を開いた。

「この建物で感染が起きている」

感染（後書き）

中置半端ですがこれで終わります。

隔離（前書き）

登場人物 SAT 指揮官 柴田和也

隔離

このアパートで感染が起きている・・・

それはいつたい何のウイルスなんだろうか。

「それはいつたい何の感染だ？」

祐介が聞いてみた。

「それは言えない。だがお前達は既に感染者に遭っている」

それを聞いて心当たりがあった。

「・・・あの老婆」

祐介は振り返り私の顔を見たがすぐに向き直りSAT隊員を睨みつけた。

「俺達をここから出せ！」

祐介が睨みつけながら言ったが効果は無かった。

「ダメです。外には出せません。あなたは感染の疑いがあります」
最後まで言うつと他のSAT部隊がやって来た。

「どうした？」

その内の一人の顔を見て祐介の顔は青ざめていた。

「兄貴・・・」

向こうも気づいたらしく兄貴と呼ばれた人物が近付いてきた。

「祐介じゃないか。なぜこんな所にいる」

「実は・・・」

祐介は今まであった事を全部言っていた。

途中説明が足りないところは私のリポーターとしての腕が役に立った。

「そうだったのか」

「兄貴、ここから出してくれよ」

祐介が窓に顔を近付けながら言った。

「残念だが俺にはお前達を出す事は出来ない。だが一つ方法がある。

」

「何だよ」

「0世代の感染者を生け捕りにしろ」

祐介の兄が言うのはこうだった。

このアパートのある部屋に隠し部屋がありそこに0世代の感染者が居るそうだ。

だがその部屋が分かっておらず私達が探す。というものだった。

「だがそこまで行く前に感染するかもしれないぞ」

祐介が反論した。

「それは大丈夫だ。感染は空気感染はしない。全て接触感染だ。例えば感染者に噛まれるとかだ」

それを聞いて思い出した。

「あの消防士の人さつき老婆に噛まれたわ」

しかし先程の消防士はどこにも居なかった。

隔離（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

感染者

「噛まれた消防士が居ないわ」

冬香が誰に問うという訳でなく聞いてみるとディレクター兼カメラマンの和明が答えた。

「その消防員ならさつき気分が悪いからってトイレに行ったぞ」

「それは不味いな。そいつは確実に感染している」

祐介の兄が不安そうに言った。

「とりあえず俺達は感染の最深部である場所に行つて0世代とかいう奴を捕まえればいいんだろ」

祐介が不安をかき消すように言った。

「それに噛まれなかったら良いんだろ。俺達には銃がある。そう簡単には感染しないさ」

だがそれでも兄の不安そうな顔はそのままだった。

「実は1時間後に自衛隊がここに到着しここの指揮権は自衛隊に移る」

「それが何だつて言うんだよ」

「自衛隊は到着次第中に突入し非感染者問わず発砲を行う」

そこまで聞いていて私は疑問に思った。

「それって無差別発砲ってことよね。それって問題にならないの」

「それは分からない。俺達SATはここを封鎖することしか命じられていない」

そこまで言うつと悲鳴が聞こえた。

「何だ」

SATの部隊が軽機関銃を取り出した。

「祐介！念の為俺の部下を二名連れて行け」

SATの隊員が二名入ってきた所で私達は悲鳴が聞こえた場所へ向かった。

悲鳴が聞こえた場所はトイレでその前に一人の女性が腕を抑えて立っていた。

「どうしましたの」

私が近づこうとするとSATの隊員に止められた。

「待てあの女の腕を見ろ」

腕には噛まれた跡がありそこから血が出ていた。

「助けて・・・さっきトイレの前で誰かに噛まれて。そしてそいつをトイレの個室に閉じ込めたの」

そこまで女性が言う中から個室を壊してあの消防士が出てきた。

「下がれ！下がるんだ」

SATの隊員が私達を下がらせ軽機関銃を消防士に向けた。

消防士が飛び掛るのと噛まれた女性の目が真っ赤になるのは同時だった。

銃弾を受けた消防士は吹き飛ばされ吹き飛ばしたSAT隊員に女が飛び掛った。

「危ない！」

私が悲鳴を上げると銃声が聞こえたのは同時だった。

女性が倒れた。

隊員は噛まれてなかった。

横に拳銃を構えた祐介がいた。

「ありがとう。助けてくれて」

SATの隊員が手を出してきて二人は握手した。

「お前結構やるじゃないか」

もう一人のSAT隊員も祐介と握手し終わると他の住人が出てきた。

「おいおいどうしたんだ。銃声が聞こえたけど」

どうやら出てきた住人は全員噛まれていないようだ。

「実はここであるウイルスが蔓延している」

「最近ここらで変わった事等はないか」

住人達は顔を合わせるとある告白をした。

「実は・・・」

ある子供連れの女性が話したことは衝撃の事実だった。

感染者（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

調査官（前書き）

久しぶりの投稿です。前回子連れの女の人が話す真実を書こうとしていましたが

書き進める内に次の話で真相を明らかにすることになりました。

調査官

「実は・・・」

彼女が話し出した時隊員の一人が中断した。

「待て、今外に政府の調査官が来ている。まずはそいつを迎えに行つてからだ」

隊員二名は先に玄関の方に行き警官が二名上に様子を見に行つた。

多数の人々が不安に陥っている中祐介は冷静に皆を落ち着け始めた。

「皆さん静かにしてください。大丈夫です。落ち着いてください」

さすがはプロとこの時ばかりは思った。

それに加えてこいつは・・・

「早くここから出してくれよ・・・」

ずっと私の後ろで独り言を言い続ける和明君とは大違いだ。

そんな時二人の隊員が調査官を連れてきた。

「皆さん静かにしてください。私の話を聞いてください」

調査官が怒鳴り声で言い皆を黙らせたあと喋り始めた。

「皆さん。パニックに陥っていますが聞いてください。実は今このアパートでウイルスが

蔓延しています」

調査官は冷静に行つたがアパートの住人はそれと全く正反対だった。

「何のウイルスが流行つてるのよ！」

「早くここから出してくれよ」

などなど多数の住人に喋られて調査官が喋り出すのを再開するのに結構かった。

「静かにしてください。感染の正体分かるまでここから出すわけには行きません。」

ですから何か心当たりがあるのなら私に話してください」

その時上から男の叫び声が聞こえた。

「何だ！？」

SATの隊員と調査官、祐介が階段に向かって走り出した。

「和明君、私達も行くわよ」

和明君は「は、はい」と返事だけして私に着いてきた。

階段のすぐ隣を走っていると頭上から何かが落ちてきた。

ぶつかる・・・そう思った私を和明君が間一髪のところ私を押し倒した。

私は立ち上がると和明君に「ありがとう」と一言だけ言った。

今回のことで少し和明君を見直した。

先程落ちてきたものを見ると私は悲鳴を上げた。

それはさっき上の階を見てくと言った警官の一人だった。

調査官（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

真実（前書き）

1000アクセスを突破しました。
あと約二話で第一章完結予定です。

真実

いきなり落ちてきた警察官の周りにSAT隊員、調査官、祐介が集まった。

「何でこんなことに・・・」

半泣きになりながら言った。

その時祐介が調査官に詰め寄った。

「おい！！このアパートには何の伝染病が蔓延してるんだ！！答える！！」

調査官を壁に押しつけ銃を突きつけた。

「おいクソやろー、俺はお前を殺したんだっていいんだぞ。俺は既に同僚を殺されたからな」

SAT隊員が祐介に短機関銃を向けた。

だが調査官はSAT隊員に銃を降ろさせた。

「残念だが私にその質問に答える権利は無い」

祐介はさらに銃を頭に押し付けた。

「良いのか、ここで死んでも」

調査官も諦めたらしくついに話し出した。

「分かった・・・話してやる。だがその前に皆をここに連れてきてくれ」

住人のほとんどを連れてきて調査官が全てを話し始めた。

「昨日、ある獣医から電話があったんだ。そいつは犬が謎のウイルスに感染し死んだと言った。

・・・だがその後犬は再び生き返り他の犬を襲い始めたというものだった」

そこまで言ったとき子供連れの女性が話し出した。

「その犬の名前ってマックスじゃない？」

「ああ確かマックスだ」

「実はその犬・・・家の犬なの」

その瞬間皆が騒ぎ出した。

SAT隊員は銃を威嚇射撃し全員を黙らせた。

「本当なのか？」

「ええ本当よ」

その瞬間調査官が手錠を二つ出した。

「それで何をする気？」

私は聞いてみた。

「これでこの女と娘を拘束する。キミ達は感染の疑いがある。それにこの女の娘は

さつきからぐったりしてるな」

彼女は後退りしながら反論した。

「違うのよ・・・娘はただの扁桃炎なのよ」

次の瞬間彼女の娘が彼女に噛み付いた。

誰かの悲鳴が上がった・・・

真実（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3261x/>

REC・in・japan/レック・イン・ジャパン

2011年12月2日19時49分発行